１.「昭君之間」のミステリー

（１）「昭君之間」は何のために作られた？

熊本城の本丸御殿に「昭君之間」という格式の高い謁見の間があります。１６１０年頃完成したとされています。書院造りの対面所形式で、高貴な人が謁見する場合に使われる鉤上段が設けられ、天井は折り上げ格天井の花天井になっています。花天井に描かれた花は、仏さまに添えるものと言われており、熱心な法華経信者の清正らしいものです。床の間の正面奥の壁一面および右横の帳台構に、中国前漢時代に政略により北方の匈奴の国王に嫁ぐことになった漢の官女王昭君の物語をモチーフにした絵が描かれていたことから、「昭君之間」と呼ばれていたということです。安土城や伏見城の様式に似ており、安土城では、絵は信長が直接指示して書かせたと言われていることから、王昭君の絵も清正が直接指示して書かせたものと思われます。清正は、通常隣の若松之間で謁見していたと言われており、このように豪華な「昭君之間」が何のために（誰のために）作られたのか、ミステリーとなっています。

（２）現在の説明と疑問

観光案内などでは、「昭君とは将軍の意味であり、豊臣秀頼のこと。清正は、豊臣恩顧の大名であり、将来秀頼が徳川幕府により大坂城を追われたとき、ここに迎え入れ、西国の豊臣恩顧の大名を糾合し、徳川幕府と戦うことを意図していた」などと説明されています。これは、１８７０年１０月に熊本城内が初めて公開された際に、実際に見学した人から聞き取った内容や実際に見学した人が出筆した内容を根拠としているようです。このときの見学者には、１８５０年代生れの人が含まれ、出筆者も１８５０年生れのようですので、江戸時代後期の熊本の武士・町人の間では、そのような話が流布されていたようです。

しかし、秀頼が就任するとすれば関白であり、将軍ではありませんから、昭君を秀頼のことと解釈するのは少し無理があります。また清正は、秀吉が信長死後自ら後継に担いだ三法師（秀信）を失脚させ、次男信雄を小牧・長久手の戦い後調略し臣従させ、天下を簒奪した経緯を知っていまから、豊臣政権から当時最強の徳川家康に政権が変わることに抵抗感はなかったと思われます。それに、昭君之間ができた１６１０年頃は、徳川幕府体制が確立し、西国に秀頼のために戦う大名は見当たりませんでした。それは大阪の役で豊臣方についた大名がいなかったことが証明しています。そもそも、秀吉死去後清正は、豊臣家に忠義を尽くすと言う意味での豊臣恩顧の大名とはいえない状況になっていました。

（３）清正と家康の接近

慶長３年（１５９８年）８月の秀吉死去後、清正は、同年１２月に朝鮮から帰国しますが、朝鮮の役で命を賭して戦い戦果を挙げたにも関わらず、小西行長や石田三成などが清正の行為を秀吉に讒訴し、それを理由として日本に帰国させられたことなどから、慶長４年（１５９９年）３月、同じく三成に不満を持っていた黒田長政ら６名の武将と決起して三成を襲撃する「七将襲撃事件」を引き起こします。三成は、常陸藩主佐竹義宣の協力により、伏見

城内の自分の屋敷に逃げ込み難を逃れます。七将はなお三成暗殺を目指しますが、家康が仲裁に乗り出します。家康は、三成の奉行職を解き佐和山城蟄居処分とすることで、その場を収拾します。

この年清正は、家康の養女（家康の従妹。家康の生母於大の方の弟で刈谷藩主水野重忠の娘かな姫。）を継室に迎えます。ここから清正は、家康に与して行きます。１６００年の関ケ原の戦いでは、清正は東軍に属し、九州で小西行長の宇土城、立花宗茂の柳川城を開城させ、その恩賞として肥後１国５４万石への加増を受けます。熊本城は、朝鮮からの撤退に伴い、今度は明・朝鮮が日本に侵攻してくる場合に備えて築城を開始したもので、家康も了承していたと思われます。

慶長８年（１６０３年）２月、家康は朝廷から征夷大将軍に任じられ、江戸幕府を開きます。その年の１０月、清正は浅野幸長とともに江戸へ参上します。豊臣家と縁が深い２人がこんなに早く江戸へ参上したことは家康を喜ばせたようで、徳川実記には、「その頃家康１０男頼宣（当時２歳）と清正次女八十姫（当時３歳）の婚約が決まった」とあります。しかし、清正は、家康のリップサービスだと思い、慶長１４年（１６０９年）１０月の正式の婚約まで本気にしていなかったように思われます。

その後慶長１１年（１６０６年）には、清正は長女あま姫を徳川四天王の１人館林藩主榊原康政の嫡男康勝に嫁がせます。清正にとって家康軍の中で先鋒を務めることが多く、多くの武功を挙げていた康政は、憧れで目標とする武将だったようで、文禄の役の際には、康政の金桔梗笠馬印を借り受けています。従ってこの婚姻は、清正・康政双方の意向を家康が承認して成立したと思われます。これで徳川家ばかりでなく、徳川譜代の有力大名とも強いつながりができ、清正は、確実に徳川幕府に食い込んで行きます。

そして、止めが慶長１４年（１６０９年）１０月の頼宜と八十姫の正式の婚約です。頼宜は当時８歳で、水戸藩主ながら駿府の家康の元で育てられ、家康の寵愛を受けていました。この婚約の狙いは、家康が清正を評価していたことはもちろんですが、家康も６６歳になり先行き長くないことから、最大の懸案である豊臣家臣従の説得を、豊臣家との関係も良い清正に期待してのことと思われます。そして、それが失敗した場合には、豊臣家を亡ぼすことを決意し、その場合、この婚約およびその後の結婚が鎹となって、清正が豊臣側に就かないことを確実にすることにあったと思われます。この年１２月家康は、駿府藩を５０万石で立藩し、頼宜を藩主としていますが、これは、この婚約に伴い頼宜の藩主の格を引上げたものと思われます。翌年の慶長１５年（１６１０年）９月には、頼宜の傅役三浦為春（頼宜の生母お万の方の兄）が結納使として熊本城へ行き、婚約を整えています。

（４）豊臣恩顧の大名の意味の変質

清正については、清正を外曾祖父とする徳川吉宗が第 8 代将軍に就任してから見直しが進み、以前の「清正＝豊臣恩顧の大名＝警戒を要する人物」という位置付けから、「清正＝豊臣恩顧の大名＝忠義の武士」という位置付けに変わっています。忠義の武士においては、清正は秀吉の子秀頼を最後まで支えたという設定が含まれていますが、実際の清正は、秀吉

死去後家康に接近し、家康の有力な姻戚大名に変わっており、大阪の陣の際存命であっても、豊臣方に就いた（秀頼を最後まで支えた）可能性は低いと思われます。従って、この意味で、清正を豊臣恩顧の大名として取り上げることは間違っており、関ケ原の戦いで、豊臣政権継続のため身命を賭して戦って死んだ石田三成こそふさわしいということになります。

（５）豊臣家に対する清正のスタンス

清正は、豊臣家が徳川幕府体制下で名誉ある地位を得られることを願っていたと思われます。それは、小田原征伐後三河・遠江への国替えを拒否し下野烏山２万石へ転封される前までの織田信雄のような地位（尾張・伊勢 100 万石）や豊臣時代に秀吉の弟秀長が所領していた大和郡山（含む和歌山）１２０万石などが考えられます。

一方で清正は、肥後５４万石を秀頼に譲り、自らは徳川姻戚として出身地の尾張近辺の中小大名になることも考えていたかもしれません。ただし、これは、京・大阪から離れたくない淀殿が嫌がり、成立しなかった可能性が高いと思います。

（６）「昭君之間」は頼宣将軍を迎えるため

それでは、「昭君之間」は何のために作られたのでしょうか？「昭君之間」の「昭君」は、「将軍」の意味であり、将来八十姫の婿となった頼宣を、願わくは将軍となった頼宣を（或いは家康を？！）迎えるための部屋として作られたものと考えられます。

婚約が決まった当時、頼宣 8 歳に対し、将軍秀忠の長子家光は 6 歳、次子忠長は 4 歳でした。家光は病弱で、秀忠および正室お江は、家光には全く愛情を示さず、次子の忠長を溺愛していたことは有名な話です（今では、家光は秀忠と春日局の間に生まれた子という説が強くなっています）。そこで幕府内では、秀忠後継は忠長と考える者が増えていました。この当時徳川家では、将軍は長子が承継するというルールはまだ決まっていませんでした。このルールが決まったのは、１６１６年に家康が家光を秀忠後継に指名した時です。従って、１６０９年の八十姫婚約時には、頼宣が家康から秀忠後継に指名される可能性もあったと思われます。頼宣は、生まれてずっと駿府の家康の元で育っています。家康は、幼い頼宜を馬に乗せ、馬から落水しても手を貸さないなど、厳しく育てたと言います。頼宣は、１３歳で大坂冬の陣に初出陣し、その際家康が自ら鎧を着せてやったと言います。また夏の陣では、頼宣が先陣を希望するも家康から却下され、涙を流して悔しがったため、家臣が「殿はまだお若いから、機会は何度もありましょう」と宥めたところ、頼宣は「１４のこのときが２度とあるか」と答え、それを聞いた家康が「今の言葉こそ鑓（武功）ぞ」と褒めたと言います。このように頼宣は、家康お気に入りの子であり、秀忠の後継将軍として、家光・忠長・頼宜（或いは義直、頼房）の中から、家康が頼宣を指名してもおかしくなかったと思われます。

１６１６年、家康が江戸城に出向き、家光後継を宣言したのは、春日局などの動きから幕府内が将軍後継問題で分裂していることを知り、鎌倉幕府や足利幕府の二の舞になることを危惧し、譜代大名が脇を固める徳川幕府では、将軍は象徴的存在でよく、長子承継が一番安定すると考えたからでしょう。従って、この時までは、頼宣が将軍になることも十分考えられ、清正が、娘婿頼宣が将来将軍になることを夢見たとしてもおかしくありません。

家康死去後の１６１９年に将軍秀忠は、頼宣を駿府藩から紀州藩に転封させ次男忠長を駿府藩主にしていますが、これは、次期将軍家光に何かあった場合、その後継将軍は忠長であることを明確し、頼宣の目を潰す狙いがあったと思われます（駿府藩主は、家康との関係の深さから言えば、次期将軍のポスト。本来なら御三家は、駿府・尾張・水戸。紀州ではない)。

（７）「昭君之間」は「八十姫の間」

もっと単純に、清正は将軍家へ嫁ぐ八十姫に王昭君を重ねたのであり、「昭君之間」とは「八十姫之間」のことで、八十姫を送り出すための部屋として作ったと考えることもできます。清正にとって、八十姫が将軍家に嫁ぐことは大変名誉なことでしたが、これにより清正は、将軍家姻戚として豊臣家を平和裏に徳川幕府体制に組み込むという重い課題を背負うこととなりました。将軍家と言う家柄および不透明な豊臣・徳川関係の行く末を考えると、八十姫には苦労が多いことが予想され、清正には、八十姫が王昭君と重なって見えたと思われます。

それでも清正は、この婚約を大変喜び、「八十姫の婚礼には、肥後藩３年分の経費をかけても惜しくない」と言ったといいます。清正は、この喜びを表すものとして「昭君之間」を作り、結納使の三浦為永を通して家康に伝えようとしたのかも知れません。

（８）清正が王昭君の名を知っていた訳

ではなぜ清正は、今でもそんなに知られた存在ではない王昭君のことを知っていたのでしょうか？清正は朝鮮から帰国後論語などの儒学を学んでいたようですが、王昭君のことを知ったのは、その前の文禄の役の際だと思われます。文禄の役の際、和議交渉が日本と明の間で行われ、つまはじきにされていた朝鮮側は、和議交渉と称して松雲大師惟政を清正のところに派遣してきます。そこで清正から、秀吉が出した和議条件の１つに「朝鮮国王の娘を日本の天皇に嫁がせること」ということがあることを聞いた惟政は、「これは王昭君の話から着想を得たものと思われるが」と述べたとありますから、清正が王昭君のことを知ったのはこのときだと思われます。苦しい朝鮮での戦いの中での話であり、清正の脳裏に鮮明に残ったものと思われます。